

琉球大学学術リポジトリ

宇宙からの地球認識をどう教えるのか： 宇宙時代の地理教育における地球認識の考察

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄地理学会 公開日: 2018-11-16 キーワード (Ja): 宇宙空間認識, 世界認識の壁, 母なる地球, 宇宙からの視点, Space recognition キーワード (En): The walls of the world recognition, Mother Earth, the view from space 作成者: 西岡, 尚也 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017681

宇宙からの地球認識をどう教えるのか —宇宙時代の地理教育における地球認識の考察—

西岡尚也

(大阪商業大学総合経営学部)

How to Teach the Earth Recognition from Space: Discussion of Earth Recognition in Geography Education in the Space Age

NISHIOKA Naoya

(Faculty of Business Administration, Osaka University of Commerce)

摘要

人類が宇宙空間へ飛び出して約半世紀が経過した。宇宙飛行士・宇宙ステーションでの長期滞在など、「宇宙から地球を俯瞰」する体験者は増えている。これらの体験者の発する言葉には「母なる地球」「生命」「環境」について、多くの示唆に富んだ内容が見られる。このような空間認識は、地理教育に変革をもたらすことになる。小稿では宇宙時代の「トータルな地球認識」という新しい地理教育の領域を、どのように考えていけばいいのかを考察する。

キーワード：宇宙空間認識，世界認識の壁，母なる地球，宇宙からの視点

Keywords: Space recognition, The walls of the world recognition, Mother Earth, the view from space

I はじめに

人はなぜ宇宙に惹かれるのだろうか。未知なるものへの好奇心，フロンティアへの開拓精神，資源による富の獲得など，様々な理由が考えられる。いずれにせよ私たちは，地球史上初めて人類が地球（大地）を飛び出して宇宙空間において生活が可能に時代を生きている。これは言い換えれば，生命の進化過程，すなわち太古の昔から海から陸地に進化した生命が「重力の呪縛」を説かれる時代でもある（小塚ほか2015：1）。

地理学は空間認識の学問として発展してきた。水岡（2005：180）は，地理学を他の諸科学から区別するものは空間であるから，まず空間とはどのようなものか明らかにしておく必要があるとし，「私たちが意識するかどうかに関わりなく，宇宙に

あまねく存在する客観的な実存である。」と定義している。

しかしながら「客観的な実存」とされてきた「人類の住む宇宙空間（岡村ほか2007）」は，地理学で「意識される」空間認識の対象とはされてこなかった。したがって，地理教育においても「宇宙からの空間認識」を考えることは皆無であった。私には本当にこのままでよいのだろうかという疑問がわいてきた。

地理学は天文学ではない。したがって「宇宙の始まりと終わり」がどのように考えられ説明されるかという領域は，天文学に任すべきであると私も考える。けれども「地球全体を視野に入れたトータルな地球認識」としての「空間認識」は地理学・地理教育の対象にするべきだという

のが、小稿の主張である。なぜなら今日「トータルな地球認識」が形成されないために、地球規模の課題が解決されにくいという実態が見られるからである。小稿は教育理論としてはまだ考察段階であるが、新しい地理教育領域への第一歩になると考えている。

II 研究目的

オーストラリアの歴史学者 D. クリスチャンが唱える「ビッグ・ヒストリー」は、宇宙空間全体を視野に入れた「歴史認識」を提示し、従来の「地球表面に限定された歴史教育」を劇的に変革しつつある (D. クリスチャン, 2015)。同時に哲学 (人生観・価値観・宗教観など) を含め、人類史における空間認識にも大転換をもたらしつつある (図 1)。学習者の空間認識や世界像形成を重要なテーマとする地理教育においても、ここから学ぶべき点が多い。

小稿では地理教育においても「ビッグ・ジオグラフィ」=「宇宙時代の地理教育」を提唱したい。

なぜなら、従来の地球表面のみを対象にした地理教育では時代遅れになってきたからである。

III 「2030 年アジェンダ」と「COP21」のギャップ

2015 年 9 月第 70 回国連総会で「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ¹⁾」が採択された。その中には「我々は地球を救う機会を持つ最後の世代になるかもしれない」とし「人類と地球の未来は我々の手の中にある」と、地球史上における現世代人類の役割があげられている。そして今後 15 年間に達成すべき地球生態系存続のための「17 の目標」が発表された。この目標達成のために「地球という惑星及び生態系が我々の故郷」=「母なる地球」を再認識するとある²⁾。

しかし 3 か月後、COP21 パリ会議 (12 月) では先進国と途上国が激しく対立し、互いに国益を主張したため会議は紛糾した。なんとか提示された CO2 削減目標には、数値があげられたものの各国の指標はバラバラである (表 1)。

それどころか目標達成義務と罰則がなく、実効

歴史 宇宙の起源から学ぶ

豪州発の授業「ビッグ・ヒストリー」

138 億年たどる つながる知識



「ビッグ・ヒストリー」を始めた
マコーリー大学
デービッド・クリスチャン教授

「19世紀の偉大な哲学者たちは普遍的な思想を持っていた。」

「ビッグ・ヒストリー」を始めたきっかけは。「私はもともとロシア史が専門だが、科学にも非常に興味があった。人間に関する学問である歴史をなぜ、国や時代で細切れにして教える必要があるのか。その疑問から大学で小さなコースを始めた」

「なぜ国や時代で細切れに？」

「歴史で宇宙の起源にまでさかのぼる必要は。」

「人間を知るために人類の起源から始めるなら20万年前に人類の進化を理解しなければ生物学を知らなければいけない。そう考えるうちに太陽系が形成された45億年前になり、ビッグバンに行き着いた」

「学問は細かく分類されすぎたと思うか。」

聖書から進化論まで縦横無尽

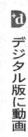
宇宙の始まりから現在に至る138億年をたどる「ビッグ・ヒストリー」。オーストラリアで1人の学者が始めた新しい歴史の授業が、世界各地の高校で広がっている。米国のビル・ゲイツ氏の支援で教材をインターネットで無料公開したのが突破口になった。 

図 1 ビッグ・ヒストリーの紹介記事 (朝日新聞 2015 年 3 月 13 日付)。

表1 主な国・地域のCO₂削減目標（多い順）

国名・地域名	削減目標：2030年までに	比較年
ロシア	70～75%に抑制	1990年比
中国	GDP当たりのCO ₂ 排出を60～65%削減	2005年比
EU	40%削減	1990年比
インド	GDP当たりのCO ₂ 排出を33～35%削減	2005年比
アメリカ合衆国	26～28%削減	2005年比
日本	26%削減（2005年比では25.4%削減）	2013年比

(JCCCAのHP(2016.2.15.閲覧)および新聞各誌報道などより作成)。

性が担保されていない。結局「2030アジェンダ」の「母なる地球」の世界再認識とは程遠い状況となった。このままでは、私たちは「地球を救えなかった最後の世代」になりそうである。

筆者はこれは教育の責任であると考え、環境問題は地球規模のテーマであり、国益や国境を越えた「トータルな世界像」から「母なる地球」を俯瞰する認識が不可欠である。しかし21世紀になっても、このような国家を超えた空間認識や世界像が人類社会共通概念となっていないため、「会議は紛糾」したのである。ここには人類史における「世界認識の壁」が存在している。

地理教育はこれまで学習者の世界像形成を積極的に支援してきた(村山2003:iii)。寺本(2003:86-88)も、子どもの内発的な好奇心を十分に引き出し、現代社会が構築している世界像を獲得させていく地理教育の意義を、大航海時代になぞらえ「子どもの地理的発見期」と表現している。

なるほど、大航海時代(15世紀中期～17世紀中期)がそうであったように、これまでの地理教育は地球表面(部分地域)をその対象として来た。したがって「地理的発見」では地球表面(部分地域)がその範囲であり、空間認識や世界像形成の対象であった。環境問題が、地方の課題だった時点まではこれでよかった。

しかしながら、現代社会は「宇宙への大航海時代(20世紀後半～)」である。そして「2030アジェンダ」の唱える「母なる地球」への概念には地球表面(部分地域)ではなく「トータルで地球を俯

瞰し捉える」という視点が加わっている³⁾。地理教育が環境問題学習において、今後も役割を果たすには「宇宙への大航海時代」に即した「宇宙時代の地理的発見」が必要である。したがって「トータルな地球空間認識」は、地理教育の新たなフロンティアとなったのである。

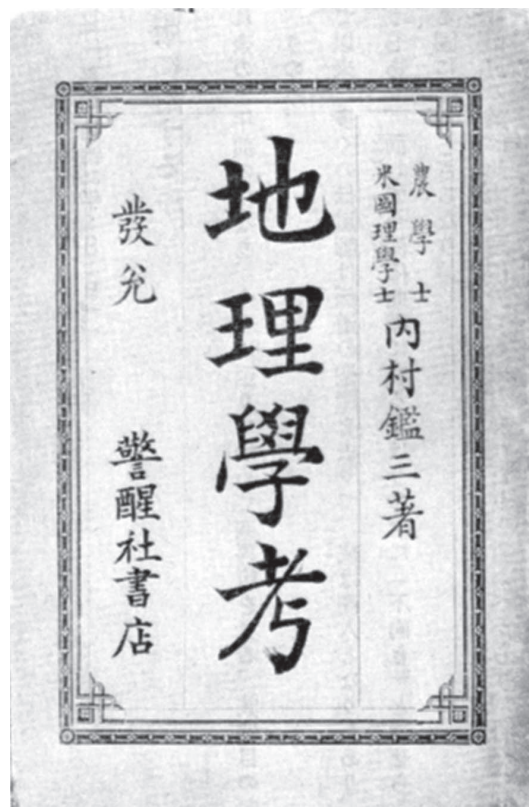


図2 内村鑑三『地理学考』の表紙
(『内村鑑三全集2』岩波書店, 1980, p.352)。

IV これまでの「宇宙空間」と地理教育思想

わが国における宇宙空間を視野に入れた「地理教育関連の思想家⁴⁾」には、吉田松陰・内村鑑三・志賀重功・南方熊楠・三澤勝衛・牧口常三郎・宮沢賢治・和辻哲郎などがあげられる。これに関しては、辻田 (1971)・国松 (1972)・中川 (1981)・武元 (1983)・吉野ほか (1987)・谷田部 (2008)・八田 (2009)・山口 (2009)・鶴見 (2011)・中瀬 (2012) などの報告がある。ここでは特に宇宙認識と地理教育を考えるうえで、筆者が重視したい吉田・内村・三澤の3人をあげて検討する。(以下各文の下線は筆者加筆)

■ 吉田松陰 (1831-59) は著書『幽囚録』(1854: 617) で「地を離れて人なく、人を離れて事なし、故に人事を論ぜんと欲すれば、先ず地理を觀よ (金子重輔行状)」と述べて、地理学を学ぶ意義を説いた。さらに『丙辰幽室文稿』(1856:334) 所収の「七生説」の冒頭で、「広々としてはてのない宇宙は一つの根本原理によって存在しており、父祖子孫が切れることなく続いているのも、一つの気があって結ばれているのである。人がこの世に生まれるにあたり、この理をうけてそれが心となり、この気をうけてそれが身体となるのである (松本ほか2002).」とし、人間は宇宙に存在する「理」と「気」の潮流が結び付き生まれたとしている。ここには今日の生命発生論や遺伝子継続・DNA理論につながる思想が存在する。

■ 内村鑑三 (1861-1930) は著書『地理学考』(1894)【のちに改題再版されて、『地人論』(1897)】(図2)の冒頭で、「之(地球)⁵⁾を空間の無限大に比すれば塵埃の細微なるも尚ほ大に過ぎるが如く、之(地球)を天體中にて大と稱すべからざる太陽に比すれば僅かに百三十萬分の一たるに過ぎず、之(地球)をその姉妹球なる木星に比するも尚ほ小豆が橙^{だいたい}における比例なり、然れども此じんあい塵埃小の空間の一點、此小豆大の地球こそ吾人生命の繋がる所にして、我は此地に始めて生を有し、此地に自覺し、此地に愛し愛され、終に此地に死骸を遺して逝く、我に生を給えせし地球、我の生命を與ふる地球、我の遺骨を託する地球、我之(地球)を研究せずして休まんや (内村 1897: 11).」と述

べている。

ここには、地球は宇宙の中の「塵埃で微細」であるが、「吾人生命の繋がる所」であるからこそ、「地球全体をトータルとして研究する」という内村の強い意気込みを感じる。

内村はまた「地理學に依りて吾人は健全なる世界觀念を涵養すべきなり、國家のみが一個獨立人たる社會にあらず、地球其物が一個有機的獨立人なり、地方が一國の一部分に過ぎざるが如く一國も亦地球てふ一「獨立人」の一部分に過ぎず (内村 1897: 20)」, さらに「真の愛國心とは宇宙の為に國を愛するを言ふなり (内村 1897: 23)」と主張している。120年以上前であるにもかかわらず、これら「健全なる世界觀念」や「地球其物が一個有機的獨立人」の視点は、国境・国益を越えて地球全体の利益のために行動しようという「2030 アジェンダ」や、「ガイア理論 (J. ラブロック 2003)」に結びつく思想である。

■ 三澤勝衛 (1885-1937) は、担当していた長野県立諏訪中学校5年生(当時)の「地理学通論」の授業では地理教科書は使用せず、1年間天文学の講義をしていた。なぜなら「地理を学習するうえで、まず宇宙の中での地球の存在とその位置をしっかりと把握する必要がある」と考えていた(金子 2009: 375)。そしてこのような地理教育における宇宙観(空間認識)の必要性に関しては、「...太陽や地球あるいは惑星の運動を真に理解させる

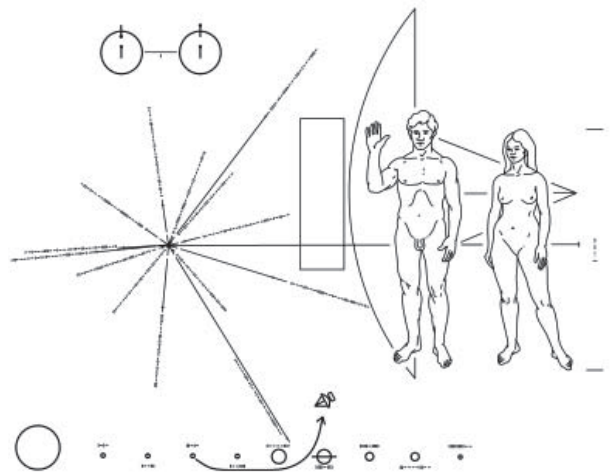


図3 パイオニア1号のメッセージプレート
(フリー百科事典・ウィキペディア HP).

ためには、単に太陽だけの事実では不十分である。当然、その範囲をこの銀河系はもちろんのこと、かの大宇宙のそれへまでもおし広めていくべきであることはいうまでもない。しかもそれが、直接には地理学すなわち風土性の認識・理解の問題であると同時に、やがてはほかの徹底した人生観の把握、ならびに創造のそれときわめて密接な関係をもつ宇宙観にふれる機会ともなり、教育上特に重大な教材とさえ私は考えている（三澤 1937：422 - 423）」としている（下線は筆者加筆）。三澤のめざした地理教育は、地球表面を超越し「宇宙空間認識」の視点から「地球を俯瞰する」地理教育であった。そしてそれは「人生観の把握・創造」と「人生観と密接な関係を持つ宇宙観」の形成であり、「宇宙の中の生き方」を学習者に迫る迫力があつた。

この3人の地理教育思想は高く評価できる。しかしながら、宇宙実体験から発せられた「言葉や思想」ではなかったため「説得力では限界」が存在する。

V 宇宙体験者の空間認識と地理教育

人間と宇宙とのかかわりを見る時、今の時代が過去のいかなる時代とも違うのは、人間が初めて宇宙空間に進出して様々な活動を展開するようになったことである。…（略）…宇宙は実体験の場となったのである（立花 2007：16）。

「宇宙への大航海時代」は20世紀後半から始まった。1957年スプートニク1号が地球周遊に成功、1961年にはボストーク1号が初の有人衛星飛行を成し遂げた。やがて1969年人類は月に到達（アポロ11号）した。その後は他の太陽系内惑星・彗星、そして太陽系外にまで無人探査機を送ってきた（図3）。

一方1998年の打ち上げ以降、2011年に完成した「国際宇宙ステーション」では、宇宙に滞在（通常6人）しながら様々な実験が繰り返されている。乗員は交代し、のべ滞在日数は5,592日間（2016.2.22.現在）＝15年以上になった⁶⁾。

このように現在は、地理教育史の視点で見れば「宇宙体験者」から、「新しい空間認識」を学ぶ絶好の機会である。これは人類史でいえば「大航海

時代」や「地理的発見時代」の航海者や探検家の報告が、大衆の「空間認識」を拡大させたことに匹敵する。したがって今日の地理教育では、宇宙飛行士の「実体験」をもとに、学習者が「新しい地球空間認識」を体験できる教材が、「内容（単元）」として加えられる必要があると私は考えている。そしてこのような地理教育なくして「2030アジェンダ」や「母なる地球」を再認識することはできない。これは前述した三澤のいう「教育上特に重大な教材」に結び付くのである。

具体的には、立花（1985）が「宇宙体験者」にインタビューして、世界観や空間認識などの変化を聞き出している。（①～④に筆者が要約、下線は筆者加筆）

1) 地球像や世界観にかかわる認識変化の体験

①：地球を離れて、初めて丸ごとの球体として地球を見たとき、はじめはその美しさ、生命感に目を奪われていたが、やがてその弱々しさ、もろさを感じるようになる。宇宙の暗黒の中の小さな宝石それが宇宙だ（立花 1985：134）。

②：地球の美しさは、そこにだけ生命があることからくるのだろう。自分がここに生きている。他にはどこにも生命がない。自分の生命と地球の生命が一本の糸でつながれていて、それはいつ切れてしまうかもしれない。かくも無力で弱い存在が宇宙の中で生きている（立花 1985：134）。

③：宇宙飛行士には自分たちが宇宙で得た新しいヴィジョン、新しい世界認識を全人類に分かち与えるべき責任がある。我々が宇宙から見た地球のイメージ、全人類共有の宇宙船地球号の真の姿を伝え、人間精神をより高次の段階に導いて行かねば、地球号を操縦しそこなつて人類は滅んでいく。人間はみな同じ地球人だ。国が違い、種族が違い、肌の色が違つていようと、みな同じ地球人なのだ。最低限これだけは知ってもらいたい（立花 1985：146）。

④：地球にいる人間は宇宙をわかつたつもりになっているが、実際には観念的にしか理解していない。しかし宇宙に出れば目の前に地球という天体がある。宇宙全体が観念としてでなく現実体

験として理解できる（立花 1985：299）

- ⑤：地球にいる人間は結局、地球表面にへばりついているだけで、平面的にしかものが見えていない。平面的にみている限り、平面的な相違点がやたらに目につく。しかし、その違いと見えるものすべてのものが、宇宙から見ると全く目に入らないマイナーな違いである。宇宙からはマイナーなものが見えず、本質が見える。表面的な違いは現象で、本質は同一性である。地表で違うところを見れば、違うと思うのに対して、宇宙から違うところを見ると、違うところも同じだと思ふ（立花 1985：248）。

2) 国境や軍事的対立にかかわる認識変化の体験

- ⑥：国境は人間が政治的理由だけで勝手に作り出しもともと存在しない。それを挟んで戦火を交え殺しあう、これは悲しくもバカげたことだ。宇宙からこの美しい地球を眺めていると、そこで地球人同士が争い戦っていることが何とも悲しい。どんなに戦ってもお互い誰もこの地球の外には出ていけない（立花 1985：256）。
- ⑦：軍事的対立をとて悲しいことだと思ふようになった。世界中の不幸な人々を全部救済しても余りあるような巨額の資金を投じて、お互いに殺しあう準備を無限に積み重ねているというこの現実には悲しむべきことだ（立花 1985：146）。

3) 環境問題にかかわる認識変化の体験

- ⑧：大気汚染は肉眼でも観察できた。それは実に悲しい眺めだ。地球全体が美しすぎるだけにそういう「シミ」のような部分をみると本当に悲しくなる。我々はこの地球に一体何をしているんだと怒りが込み上げてきた（立花 1985：254）。
- ⑨：宇宙から地球を見て大気層の「ひ弱」にショックを受けた。環境への配慮なしに人間は生きていけない（立花 1985：308）。

①～⑨はいずれも「自らの実体験」から出てきた言葉であり、教材としては「説得力」が十分にある。今後はさらに「宇宙体験者」の「体験談」を集めて整理していけば、「宇宙時代の地理教育」教材として有効な活用が可能である。

VI 「地球表面」に限定された地理学・地理教育の限界

地理学を他の科学と区別するものは空間であり、空間は物質が現実中存在するため不可欠な存在であるが、近代科学は空間を捨像し、「一点世界⁷⁾」の前提で理論を構築してきた（水岡不二雄 2013：90）。その結果、近代地理学はその対象とする空間を宇宙全体ではなく「地球表面」に限定する形で発展してきた。しかしながら一方では、このような空間の「有界化⁷⁾」は地理学・地理教育の学問領域を狭めてきたのである。わが国の過去の地理教育では、同様に「地球表面」をその対象とし、「地理的なものの見方・考え方」を培うことが目標とされてきた。

稲盛（2001 p.72）は、「科学として小さな事実を確認し、議論して積み重ねていったとしてもそれで全体がわかるとは限らない。人間や宇宙の全体を考えるためには、創造主の視点から「俯瞰すること」が必要になる。今こそその時期だと考えたい。細かなことをいじくり回していたのでは、決して全体の正しい姿は理解することができないのである。（下線は筆者加筆）」と述べている。

これを今日の地理学・地理教育に当てはめれば、「小さな事実（地球表面：部分地域事象）学習」を、どれだけ積み重ねても「全体（トータルな地球像）認識」には至らないのである。つまり「地球の上にいるので地球が見えない（立花 1985：299）」のである。環境問題が地球全体に拡大し、その対応が緊急となった現代、宇宙から地球全体を俯瞰する技能の獲得が地理教育の目標になった。

VII まとめ：宇宙時代の地理教育のスタート

山口（2012：1）が指摘するように「地人論から宙地論への地理教育の転換」は、低迷している地理教育の価値を挽回するチャンスになる。ただしそのためには宇宙を視点に入れた地理教材の開発が不可欠となる。

例えばグーグルマップなどの衛星写真、さらには国際宇宙ステーションからの映像は、使い方次第で学習者の世界観や生き方を劇的に変革する可能性を持っている。それに加えて宇宙飛行士の「体

験談・言葉」を同時に用いることで、さらに強い説得力から「地球環境のもろさ」「母なる地球」を訴えることができる。このような手法や教材を工夫しながら、「宇宙からの空間認識」を地理教育の新たな「内容（単元）」に加えたい。

このことを通して「小さな地球表面」にへばりつき、「国益」や経済優先の領土紛争が、いかに愚かであったかを訴えられる。学習者が「宇宙からの視点」を追体験し獲得することで、人類の世界観を良い方向に変革できるのである。

20世紀末までの地理教育は、どちらかといえば、「国益」のための世界認識教育であった。21世紀には「国益」を越える「地球益」さらに「宇宙益」の形成まで視野に入れた、地理教育の新たなステージが始まった。「宇宙時代の地理教育」＝「ビッグ・ジオグラフィー」の誕生が今こそ待ち望まれている。

注

- 1) 国連文書 A/70/L.1 を基に外務省で作成「仮訳」全 37 頁。国際連合広報センター HP (2016.2.15. 閲覧)。以下本文では「2030 アジェンダ」と表記する。
- 2) 同上「仮訳」13-14 頁。
- 3) これに似た考え方には、「地球を巨大な生命体」とみなす「ガイア理論」がある J. ラブロック (2003)
- 4) 地理学者ではない場合も含むが、いずれもその著書には「地理学の露頭 (辻田 1971 : 256)」がみられ、地理教育との接点があると考えられる思想家である。
- 5) 引用文中の (地球) は筆者が加筆補正したものである。
- 6) ウィキペディア・フリー百科事典 HP, 「国際宇宙ステーション」(2016 年 2 月 22 日閲覧) による..
- 7) 近代地理学は空間全体を学問の対象としたのではなく「一点世界」＝地球表面にその対象を限定「境界による人為的な隔離 (水岡 2013 : 90)」することで、宇宙全体を対象としていた古代の地理学から脱却して発展をとげたと考えられる。
- 7) 水岡 (2013 : 90) は、絶対的空間は、意図せざる均質化を否定するため、境界による人為的な隔離、すなわち「有界化」がなされると説明している。

文 献

稲盛和夫 (2001) : 『稲盛和夫の哲学』 PHP.

- 内村鑑三 (1894) : 『地理学考』 警醒社書店, 『内村鑑三全集 2』 岩波書店 352-480.
- 内村鑑三 (1897) : 『地人論』 岩波書店・岩波文庫 (復刻 1942).
- 岡村定矩ほか編 (2007) : 『シリーズ現代の天文学 I, 人類の住む宇宙』 日本評論社.
- 金子佳正 (2009) : 三澤勝衛と太陽観測, 『三澤勝衛著作集・風土の発見と創造 4・暮らしと景観——三澤風土学私はこう読む——』 農文協, 所収, 376-381.
- 岡松久彌 (1978) : 『人生地理学概論』 第三文明社
- 小塚荘一郎・佐藤雅彦編著 (2015) 『宇宙ビジネスのための宇宙法入門』 有斐閣
- J. ラブロック (2003), 松井孝典監修 : 『ガイア地球は生きている』 産調出版. James Lovelock (1991) : *Gaia The Practical Science of Planetary Medicine*. Gaia Books Limited, London.
- 武元茂人 (1983) : 牧口常三郎の地理教育論その 1——ヒューマンエコロジーと社会認識教育——, 「三重大学教育学部研究紀要 (教育科学)」 34 卷, 1-11.
- 立花 隆 (1985) : 『宇宙からの帰還』 中公文庫.
- 寺本 潔 (2003) : 地理教育の内容, 村山 (2003) 第 4 章, 87-88.
- 辻田右左男 (1971) : 『日本近世の地理学』 柳原書店.
- 鶴見太郎 (2011) : 内村鑑三と牧口常三郎——『地理学考』から『人生地理学』へ——, 新保祐司編『内村鑑三 1861-1930』 藤原書店, 別冊「環⑧」, 所収, 123-126.
- D. クリスチャン著, 渡辺正隆訳 (2015) : 『ビッグヒストリー入門——科学の力で読み解く世界史』 WAVE 出版. David Christian (2008) : *This Fleeting World A Short History Of Humanity*. Berkshire Publishing Group LLC.
- 中川浩一 (1981) : 解題『地理教授の方法及び内容の研究』(『牧口常三郎全集第四巻』 所収) 第三文明社, 393-409.
- 中瀬善陽監修 (2013) : 南方熊楠——森羅万象に挑んだ巨人——, 別冊太陽 192
- 八田二三一 (2009) : 地理教育への宮澤賢治思想の活用可能性に関する考察, 「地理教育研究」 No.5, 11-19.
- 三澤勝衛 (1937) : 世界と地域をつなぐ教育——外国地理教育論——, 『三澤勝衛著作集風土の発見と創造 2, 地域からの教育創造』 農文協, 379-434.
- 水岡不二雄 (2005) : 空間・領域・建造環境, 水内俊雄編『シリーズ人文地理学 4, 空間の政治地理』 朝倉書店, 179-210.
- 水岡不二雄 (2013) : 「空間」, 人文地理学会編『人文地理学事典』 90-91.
- 村山祐司編 (2003) : はしがき, 『シリーズ人文地理学 10, 21 世紀の地理——新しい地理教育——』 朝倉書店, i-iv.
- 谷田部嘉博 (2008) : 内村鑑三の地理思想と国内諸地域論に

- 関する地理教育論的研究, 「地理教育研究」 No.1, 2008, 50-57.
- 山口幸男 (2009) : 『地理思想と地理教育論』学文社
- 山口幸男 (2011) : 高校地理教育の改善方向と地歴連携のあり方, 学術の動向 2011 年 9 月, 16-21.
- 山口幸男 (2013) : 月の地理教育——宇宙化時代の地理教育の教材開発研究——, 地理教育研究, 第 10 号, 1-9.
- 吉田松陰 (1854) : 「金子重輔行状」, 山口県教育委員会編 (1936) 『吉田松陰全集第 1 巻』岩波書店, 615-617.
- 吉田松陰 (1856) : 『丙辰幽室文稿』「七生説」, 松本三之介ほか (2002) 『吉田松陰・講孟余話ほか』中央公論新書, 334-336.
- 吉野正敏ほか (1987) : 三澤勝衛その史的考察, 特集風土の教育者三澤勝衛, 「地理」 32 卷 10 号, 28-38.